

# 「資本論」初版以後とその各国における普及状況

長谷部 文雄

「『資本論』初版以後とその各国における普及状況」という題目になっておりますのは、ここにおられる梯先生がこういうことでしゃべれということでありましたので、おまかせしたのであります。これは私がひがんでいるのかも知れませんが、「お前は『資本論』の翻訳しかしてないのだから、それくらいしか知らないだろう。だから、そういうことでお茶をにごせ」ということであろうかと思ひます。少々ひがんでいるかも知れませんが、まあ、そういうことを中心にお話したいと思ひます。

こういうテーマは、じつは、ひよつとすると皆さんに興味をもつていただけるかどうかという点、若干疑問もあるわけでありますが、せっかく多勢の方に集っていただいたのですから、なるべく面白い話をしたと思うのですけれども、私は話が下手なので、はたして、面白く聞いていただけるかどうかわかりませんが、ともあれ、ご辛抱ねがいます。

暑いので、ちょっと脱がしていただきます。

ご承知のように『資本論』の第一巻の初版が出ましたのは一八六七年であつて、ちょうど百年前、九月十四日とかいふことです。ものによりますと九月二日頃とあり、私も何かに九月二日頃と書いたことがあるのですが、

『資本論』初版以後とその各国における普及状況（長谷部）

最近出版された雑誌なんかみますと九月十四日とあつたと思います。九月といいますと、まだ二、三カ月さきであります。大まかにいって百年前ということでもあります。今年が明治元年から百年目として、明治百年祭だとか、イヤ来年がそうだとか、いわれております。一八六七年の九月というのは慶応の終りで、まだ明治になつていないようであります。だから百年前というのは、明治元年の前の年ということになります。

だいたい、日本の資本主義が確立されたのは、明治三十年前後ということになっております。ついでであります。私が、私は明治三十年の生れでありまして、私が生れた頃が日本資本主義の確立した時代というわけであります。したがって、それよりも三十年前、明治維新の前後のこと、日本はまだ徳川末期でありまして、資本主義体制はまだまだという、そういう時代に『資本論』という書物が書かれたのです。皆さんの中には『資本論』全部を読んだ方、——読まなくてもですね、ちょっとのぞいて見るくらいなら大部分の方がみられたと思うんですけども、この『資本論』という書物が書かれた具体的な材料、資料とした国はイギリスなんです。イギリスをモデルにして、いろいろなイギリスの経済現象を分析し、そして抽象的な『資本論』の理論をうち立てると同時に、また、その理論を現実のイギリスにあてはめて、いろいろと展開している、そういう書物であります。ご承知のように、イギリスは世界でいちばん早く資本主義が発達した国です。ドイツではだいたい一八五〇年頃にやっと資本主義が確立された。イギリスではご承知のように一七〇〇年代、十八世紀の後半から十九世紀のはじめにかけて産業革命が確立した。そして産業革命が確立したという事は、つまり、資本主義が確立したということになるわけですが、それに関連して面白いのは、経済学でいちばん古い書物、経済学をうち立てたといわれる書物は、アダム・スミスの『諸国民の富』、『国富論』だといわれます。アダム・スミスの“Wealth of Nations”

——これが出たのは一七七六年。今から百九十年ほど前で二百年に近い。あと十年ほどしたならば、アダム・スミスの『国富論』の二百年記念祭がおこなわれると思います。つまりアダム・スミスの『国富論』は、まだ資本主義が完全に確立しない前、資本主義がどうにか軌道にのりはじめた時代の書物であります。また、『国富論』から四十年たちまして、『資本論』より五十年前、一八一七年にはリカードの『経済学原理』が出ております。

『資本論』の中でいちばんたくさん引用されておる書物は、アデア・スミスの『国富論』とリカードの『経済学原理』であって、これはマルクスがひじょうに高く評価すると同時に、批判の対象とした書物です。マルクスはリカードを古典派経済学の完成者、科学的なブルジョア経済学の完成者だといっています。今年はこのリカードの『経済学原理』の出版百五十年に当るわけです。それから、すでに講演があったと思うんですけれども、いまからちょうど五十年前の一九一七年にレーニンの帝国主義論が出ております。大ざっぱに申しますと、アダム・スミスの『諸国民の富』が出て二百年、リカードの『経済学原理』が出て百五十年、『資本論』第一巻が出て百年、レーニンの『帝国主義論』が出て五十年。そういうことになります。そうすると五十年目、五十年目にはひじょうにすぐれた経済学の本が出ていますから、今年あたり、また世界的な、歴史的な古典が出そうなのですが、どうでしょうか。というよりも、私は『資本論』に匹敵するような原理的な経済学の書物は、もう出る必要性も必要もないと思うんです。というのは、ひとくちに申しますと、資本主義経済の根本的運動法則はもう『資本論』で説明されているからです。

さて、私は『資本論』の百年ということにちなんで、お話を表題のようにしぼりまして、『資本論』第一巻を中心にお話したい。あまり年代や、人の名前なんかばかりをこまかく申しあげますと、話す方は面白くても聞か

れる方では面白くないと思うんで、なるべくエピソードのようなものをまじえながらお話ししたいと思います。

『資本論』の初版が百年前に出たときには、たった千部しか印刷されませんでした。日本の書物なら、だいたい、普通の専門書ですと、本屋から出るとき、たいてい初版は千五百から二千部くらい刷らないと採算がとれない。増刷する場合には、五百部というのもありましようが、だいたい千部くらいは印刷しないと算盤がもてない。千部というのはそういう数字なんです。ところがマルクスの『資本論』はたった千部しか出なかった。印刷されなかった。それが売れてしまいうまでに四年間もかかっている。これは『資本論』が出たとき、どんなに冷遇されたか、無視されたか、売れなかったか、という証拠だと思うんです。その千部の『資本論』が、今日、世界にどれだけ残っているか、はっきりしたことはわかりません。私の想像では、いくら多くても百冊は残っていないだろうと思います。というのは、これはドイツで出た書物であります。ドイツは第一次世界大戦、第二次世界大戦と二度の大戦があり、そしてその間には、ナチスのヒットラーのファッショ政権がありました。ヒットラーはマルクス主義の書物なんか全部集めて焼いてしまった。戦災でも焼けたでしょうが、探し出して焼いてしまった。そういうわけでドイツにはほとんど残っていない。そして、世界にどれだけ残っているかということは、はっきりしたことはわかりませんが、日本のマルクス経済学者、『資本論』に興味をもっている学者たちが、アメリカへ行ったり、イギリスへ行ったり、そのほかヨーロッパ諸国、ソヴェトにも行って、ドイツにも行って、『資本論』の初版本をさがしまわった話を聞いたことがありますけれども、アメリカにもわかつている限りでは数冊しかない。イギリスにもわずかに二、三冊しかみつからなかった、ということなんです。日本では、それが驚くくらい二千冊ほどもあるのです。ソヴェトのことはよくわかりませんが、ソヴェトでも二十冊以上はないだろうと思

います。日本には二十冊以上確実にあります。私ももっております。私は第一巻だけでなく、第二巻も第三巻も初版をもっておりますが、これは、ここにおられる梯先生の御力ぞえによって手に入れたのです。これは『資本論』なんかに興味をもっていそうにない黒正巖という岡山大学長をしておられた、もうなくなられた先生がもっておられたものです。この黒正さんは、私より三年くらい京都大学の先輩であって、今でもお元氣なはずの経済史専門の本庄栄治郎先生のお弟子さんです。その黒正さんがもっておられたものを譲ってもらえということで、梯先生が仲立ちをしてくださって手に入れたものなんです。黒正さんが誰から手に入れたかといいますが、私とほとんど同年の新明正道という東北大学の先生をしておられた先生が、たぶん若い時にドイツへ行って買ってきたものらしく、新明さんの蔵書印が押してあります。新明先生は社会学者であります。『資本論』を直接に必要とされない勉強をされたらしく、なんらかの理由で手放されたものが黒正さんの手に入った。それから私の手に入ったという次第です。そのほか二十冊ばかりの『資本論』初版本がどこにあるかということは、だいたいわかっておるのですが、くわしくは申しあげません。

とにかく、日本人はですね。——これが日本人のいいところかも知れませんが、外国へ行って文部省やどこの学校から大した留学費ももらわないのですけど、その金を節約して『資本論』というような古典を買ってくるという、わるくいえば骨董、よくいえば非常な学問尊重の精神、そのおかげで日本に二十冊もの『資本論』初版本が残っているのだと思うんです。

ご承知のように今年に『資本論』百年を記念して、いろんな雑誌の特集号が出ております。経済学会関係でも『資本論』百年にちなんだ幾つかの催しがあるらしい。私どももはいつております経済理論学会という学会、—

——會員千人くらいで、だいたい『資本論』を中心とする、少なくとも『資本論』に興味をもっている学者、——大学院学生もいます。——そういう『資本論』に関心のふかい学会ですが、この学会では、記念事業として『資本論』初版が現在の『資本論』の版本と、どういうふうに関連しているかというものを研究した書物を出す計画があります。はじめには原文で、初版の原文と現在の原文とくらべるといふ意見もあつたんですが、それでは一般むきではないということになりまして、『資本論』の初版本と現在の版本との違うところを訳文でくらべ、そのうえ、必要なところには原文をいれるということになっているかと思ひます。専門の学者たちが分担してやっております。いつ本になって出るか、私は直接に関係してないので知らないのですけれども、出ましたらぜひ読んでいただきたいと思ひます。

さて私は、さっき御紹介がありましたように、京都大学の河上肇先生の門下生であります。昭和時代ならば、今年は四十二年だから、昭和何年は何年前だということがわかりませんが、私の学生時代は大正なんです。大正九年から十二年まで京都大学におりました。そして大正十三年に同志社に勤めまして、昭和八年までおりました。その昭和二年頃ですね、今から四十年前、私はまだ学校を出てまもない時代であります。河上先生からこれをやれといわれた仕事が『資本論』初版の第一章なんです。第一章といいますが、現在の『資本論』では第一編でありまして、第一章、第二章、第三章を合せたものが『資本論』の初版では第一章になっております。それと、初版本の巻末に『価値形態論』という附録があります。さっき、この『資本論』の初版本が日本に現在二十冊ほどあると申しましたが、その頃には二十冊あることはわかっていなかった。大原社会問題研究所というのがありまして、これは大正時代から昭和の始めころには大阪の伶人町という所にあつたんですが、そこに『資本論』の

初版本があった。その大原研究所の所長は高野岩三郎という先生。それから現在生きておられる方では、その頃には学校を出て間もない三十才位の研究所員でしたが、さきごろ法政大学の総長をしておられた大内兵衛先生、それから、まだ元気で『資本論』中心の学問をやっておられる久留間鮫造先生、そのほか、河上先生のお弟子ともいえる櫛田民蔵先生、そのほか、現在の学生諸君には不思議でしょうが、森戸辰男さんも大原研究所の所員でした。その大原研究所の事業として、河上先生が『資本論』の初版本の原典に訳文をつけたものを作る仕事をひきうけておられたのです。ところが河上先生は昭和二年から『資本論』の翻訳を始められた。これは宮川実君、——名前はご存知でしょう。私の親友で高校時代の同窓なんです。この宮川実君は東大の英法を卒業した法学士なんです。私が京都で河上先生の弟子であった関係から、どんなに『資本論』が面白いか、経済学をやれというわけで、宮川実君を京都へひっぱってきました。そして河上先生に紹介し、弟子になったわけです。それから今の和歌山大学、その当時は和歌山高商の経済原論の先生になるんでありますが、その宮川実君が河上先生の『資本論』の下訳をしまして、河上肇、宮川実共訳ということで岩波文庫から『資本論』の翻訳が出版されはじめたその当時にござりますから、河上先生は「いま言った大原の『資本論』の仕事は自分でやる暇がない。先生はひじょうに仕事が緻密で丁寧でありますから、あれもこれもいっしょに、ちゃらんぽらんに行ってしまおうということができない人でありますので、お前がやれということになり、私がやることになったわけです。『資本論』の初版本の、これは大原に一冊しかない、ほかにも何冊かあることはわかっていたけれども非常に貴重な書物ですが、これを大原で写真にとりまして、今ならばコピーか何かで簡単なんです。その当時に普通の、あの写真ですね、ガラスの乾板にとりまして、何枚か複写して、河上先生、大原関係の人々、何人かに分けてた、——もらったの

か借りたのか知りませんが、その一つを私が借りて原稿がわりにして、これは大事なものですからなるべく汚さないようにして、京都で印刷し、翻訳文をつけました。左側の頁はドイツ語で印刷し、右側の頁には、ちょうど左側にドイツ語で出ている部分の日本語をつけたのです。私は生意気にも、あまり先生に相談もしないで、かつてなことをやった。岩波文庫の訳文があったのですが、その訳文をそのままとらないで、自分で勝手に訳しなしたりしたんですが、とにかくそういう仕事をやりました。それから一、二年たったのちに、こんどは原文をとってしまつて、訳文だけを岩波文庫から『資本論初版鈔』という本にして、カウツキー版やエンゲルス版と比較考証したものを出版しました。

さて、『資本論』の初版が出たのは一八六七年であつて、第二版——マルクスが生きているあいだに出たのは第二版までですが、この第二版は一八七二年です。だから初版が出てから五年たつてから第二版が出た。それから第三版は、マルクスが出すつもりで準備はしていたが死んじゃつて出せなかつた。マルクスが一八八三年に死んだ後、エンゲルスがマルクスにかわつて第三版を出した。それから一八九〇年にエンゲルスが手がけた第四版、これはエンゲルス版の最後の版であります。これが大正の終りから、昭和のはじめにかけて日本で行なわれた『資本論』の原書、というのはエンゲルス版の第四版をリプリントしたもの、——第七版、第九版というようなものが日本に入つてきた。私もはそれで『資本論』を勉強したわけであります。これらの版本は第四版と相違はありません。これといつしよに読まれたのはカウツキー版『資本論』です。これは一九一四年、というのは第一次欧州大戦が始つた年であります。ロシア革命が一九一七年で、それより三年前、一九一四年にカウツキー版の第一巻が出ました。ところがこのエンゲルス版とカウツキー版とは内容が違ふ。だいたい同じですが、こ



まかいところでは毎頁のようにどこか違ったところがある。どういふふうに違ふかといひますと、エンゲルスの第四版といひますのは、マルクスがやった第二版をもとにしてすね、マルクスが第二版あるいは初版本に書き入れた訂正箇所をエンゲルスが第三、第四版に取り入れたばかりでなく、同時に一八七二年、つまり『資本論』の第二版が出たのと同じ年から『資本論』のフランス訳が出た。このフランス語版は四十四分冊というたくさんの分冊で三年間あまりかかって出たのでありますが、分冊が完結してからは単行本になっております。最近の広告を見ますと、このフランス語本のリプリントが『資本論』百年記念で出版される。なんでも四千円で売られ、五月中に申しこめば一割引きだとかいふのを見ましたが、このフランス語版は単なる翻訳ではありません。ロシアという人が翻訳したんですが、これにマルクスがたくさん手を入れ、だいぶん書きかえて内容がかわっております。マルクス自身、このフランス語版は独立した学問的意味があるんだ、ドイツ語ができる人もフランス語版を参考にしてくれというようなことを書いています。このフランス語版からエンゲルスが第三、第四版にいろいろとり入れておるのであります。カウツキー版の方は、これはどういふわけなのか、よくわかりませんが、エンゲルス版の第四版を基礎にはしないで、マルクスの第二版を基礎にしております。そして、この一九一四年といひますと、もちろんエンゲルスは死んでおります。エンゲルスは一八九五年に死んでおりますから、エンゲルスが死んでから約二十年たってカウツキー版の第一巻が出たわけですが、これはカウツキーがエンゲルスの第三版、第四版を無視して、第二版をもとにして、マルクスの書き入れたものを参考にし、またフランス語版を参考にして編集しているのです。カウツキー版『資本論』がエンゲルス版と違う第一の原因はこれなんです。もう一つは、マルクスのやった『資本論』第二版、あるいはエンゲルスのやった第三版、第四版では、ほんらいのドイツ語で

『資本論』初版以後とその各国における普及状況（長谷部）

ない英語系、あるいはラテン語系の言葉がたくさん使われていますが、カウツキーはそれをなるべくほんらいのドイツ語になおすことをやっております。こういうわけで、カウツキー版とエンゲルス版とは相当大きな相違がある。そこで私は、さきに申した岩波文庫の『資本論初版鈔』では、初版の訳文をもとにして、そのうえ、ここはエンゲルス版ではこうだ、カウツキー版ではこうだということをできるだけ詳しく考証しました。それから、違ふところが大部分で同じ部分が少ないというようなどころでは、共通の部分はここというふうに同じところだけをあげるといふやり方をしたのであります。こんど学会で記念事業としてやるはずの『資本論』の初版本と現行版との異同の研究はどういう表題になるか知りませんが、これは、私がやった部分だけでなく、『資本論』の第七篇、第一巻の終りの部分、あの蓄積論のところの異同も比較考証されるはずです。あそこの所はひじょうにかわっているんです。マルクスがフランス語版でずいぶん書きかえておるのですが、初版と再版とでも違います。そういう相違点もこんどは比較考証されるはずなので、大いに期待しているわけでありす。

さつき、『資本論』初版は千部しか印刷されなかった、それも四年かかってやっと売れたということを申しあげました。ところが一八七二年に出たフランス語版の第一分冊は一万部です。それからロシア語版がでた。『資本論』のロシア語版もひじょうに早く出ました。一八七二年にフランス語版が出た年、『資本論』の第二版が出た年、——フランス語版も、ドイツ語版第二版も、単行本でなく、分冊で出たのでありますから、一八七二年といつてもこの年にはできあがらないで、はじめの方の分冊だけが出たのであります。七二年という年は『資本論』の第一巻初版が出てから五年目のフランス語版が出た年であり、またロシア語版が出た年であります。『資本論』第一巻第二版の後書きをみていただくと、このロシア語版のことが書いてある。りっぱな、優秀なロシア

語訳が出たとかいてあります。ダニエルソンという人の訳であつて、——私はロシア語が読めないのでわかりませんが、よくできているらしい。面白いことです。『資本論』にかぎらず、『共産党宣言』でもですね、そのほかマルクス主義のいろんな文献でもですね、ロシアでは翻訳がひじょうに早く、訳本の種類もたくさんあるということ、これは面白いことであります。『資本論』の英訳は不思議にもたいへんおそいのですが、ロシアではひじょうに早く、第一巻は、さっき申しましたとおり、ドイツ語版が出てから五年めに、フランス語版と同じ年にロシア語版が出た。第二巻、第三巻の翻訳がいちばん先に出したのもロシアです。ロシア語版の第二巻は、ドイツ語版が出たのと同じ一八八五年に出ました。エンゲルスが『資本論』第二巻の校正刷りをダニエルソンというロシアの訳者に送つて、ドイツ語版が出てからでなく、出ないうちから翻訳をやつたということなんです。第三巻もですね、ドイツ語版が出た一年あまり後の一八九六年にはもうロシア語版が出ました。第一巻だけについていいますと、ドイツ語版の初版は千部しか印刷されなかったのに、ロシア語版の第一巻は三千部も印刷されました。それが一年で売りきれてしまったということです。なぜロシアでは『資本論』の翻訳がそんなに早く行なわれ、しかもひじょうによく売れたかということ、——これは興味のあることです。

話とはびますが、日本で『資本論』の翻訳にはじめて手をつけた人は、明治のおわりころ、阿部磯雄さんだということ。阿部磯雄さんというのは、早稲田の教授をしておられた、野球で有名で、社会運動もやつた、阿部先生です。しかしこの阿部先生の『資本論』は本にはなりません。日本で『資本論』の翻訳が最初に出版されたのは大正八年、私が京都大学に入る前の年のことで、訳者は松浦要さんです。この松浦さんは現在でもお元気で東京におられるらしい。それから生田長江訳も出ました。生田さんはニーチェの翻訳なんかもしている

文芸評論家です。しかしこれらの『資本論』は一分冊か二分冊でおしまいになった。そのあとで出たのが皆さんもご承知の高島素之訳の『資本論』で、これは大正九年から出ました。最初の部分は大鑑閣という本屋、終りの部分は而立社という本屋ですが、それがたぶん九分冊になって、ひじょうにりっぱな本が出ました。それから二、三年たちますと新潮社——、文学書などを出している新潮社からですね、背皮のりっぱな本——全四巻の本が出てよく売れた。それから最後に、この高島訳は、改造社の『マルクス・エンゲルス全集』にはいつて、これは一冊一円、仮綴のは八十銭というひじょうに安い五冊本ですが、第一巻は十万元以上売れたらしい。『資本論』がひじょうに普及したわけです。この大正八、九年という年は『資本論』の邦訳が三種類もいっしょに出たという大変な『資本論』ブームの年だったわけですが、それも偶然ではないんです。大正六年がロシア革命の年でありましてから、このロシア革命によってマルクス主義というものが人の注目をひくようになり、若いものがどんどんマルクス主義にはしる。私なんかもそういう影響をうけたのです。私の高等学校時代は大正五年から九年まででした。私は怠け者で学校を一年休みましたから、高等学校を四年かかったのでありますが、高等学校時代に読んだものは、トルストイだとか、西田さんの『善の研究』だとか、——哲学の書物かロシア文学書などです。日本のものでは白樺派の文学をかじりました。半分は文学青年であり、半分は哲学青年でした。そしてせいぜい人道主義的な甘い考えをもっていた。しかし私なんか、学校がどうも面白くない、——というよりも人生の生甲斐というのがわからない。私よりちょっと前に藤村操という、——これは、さきごろ亡くなられた安倍能成さんと高等学校時代、昔の一高時代の親友だった藤村操という哲学青年が日光の華厳の滝へとびこんで死んだ、——巖頭の感とかいうものを残して、一口にいえば厭世自殺をしました。私なんかそんなつきつめた人間ではない。人間が

安っぽくお粗末にできていますから、自殺するなんていうつきつめた考えはない。ただ何となく面白くない。それで高等学校も四年かかったわけでありますが、卒業するころにも、学校を出たって面白くないので学校をよしちやおうかなどと迷っていたのですが、今も元気にやっておられる武者小路実篤、——あの武者小路さんが大正八年だったか、宮崎県に「新しい村」というのを始めました。これはトルストイ主義といえますか、また一方からみればロバート・オーウエン、イギリスの空想的社会主義者であります。南米だかに移住村のようなものを作ろうとして失敗したオーウエンの真似をしたような、マア、そういう武者小路さんの「新しい村」——詳しいことは忘れてしまいましたが、武者小路さんが空想的なまた人道主義的な青年たちを集めて作った「新しい村」に行こうかと思つたのでありますけれども、私の生家は百姓でありまして、農民の生活がどんな苦しいものかという、——どんなに調子のいいことを考えていても現実がなまやさしいものでないことを知っており、優柔不断で決心できないうちに高等学校を卒業してしまいました。たまたま河上先生が人道主義、——これは河上先生の『自叙伝』をご覧になればわかりますが、河上先生は若いときに、無我苑という東京の巢鴨あたりにあった一種の宗教団体にとびこんだ、——要するに自我を捨てて、己を空しうして利他主義に生きる、——そういう生活をされた河上先生が、ちょうどそのころ京都大学の教授であつて『貧乏物語』をかいて有名でした。この『貧乏物語』を読んで私は日向の「新しい村」に行くよりも河上先生の弟子になろう、——そういうつもりで京都大学に入学しました。けつしてマルクス主義者になろうとか『資本論』をやるなどという、そんなつもりはありませんでした。河上先生の弟子になればいい、河上先生が文学部にいれば文学部にゆく、法学部にいれば法学部にゆくというふうな気もちでした。ところが河上先生は、私が京都大学にはいった大正九年ころから『資本論』に

没頭されたらしい。しかし私どもが最初に京都大学で聞いた河上先生の前論の講義は、まだ『資本論』の講義でなくて普通のブルジョア経済学の講義でした。河上先生の最後の講義は昭和三年ですが、この講義はすっかり『資本論』の講義でありまして、これをまとめられたのが『経済学大綱』です。筑摩書房の『河上肇著作集』にはいっておりますし、角川文庫にも入っておると思います。戦後になって『資本論読本』とか『資本論入門』とかいうような書物がたくさん書かれています。たいして河上先生の『資本論大綱』を参考しているはずですが、私なんかマルクスをやり『資本論』を読めるようになったのは、坂の上から下に自然にころがっていくようなものであり、砂に水がしみこむようにごく自然でしたが、河上先生なんかはそうではなくて、ブルジョア経済学の体系をちゃんともっている。そして京都大学のそうそうたる教授であり、学問的にはもう努力なんかしなくても今までの知識で充分やっていけるのに、今までの自分のブルジョア経済学の体系を棄てて、むつかしい『資本論』を研究しはじめた。河上先生が『資本論』をはじめて見たときには、これはいったい本気で読んでいいのかどうか、全部まちがいないかなどと思われたそうであります。そういう書物を四十才も過ぎてから、自分でできあがった体系をすてて新しい学問にはいっていく、——こういう点は、私どもがいくら河上先生を尊敬しても足りない立派な態度だと思ふんです。

さて『資本論』の高島訳が出たのは大正九年からであります。九年から四年間ほどかかって全三巻が出た。『資本論』といいますが普通には全三巻といえます。しかし、広い意味では『剰余価値学説史』も『資本論』の中にはいるという考えを私は昔からもっておりますが、十年ほど前にモスクワのマルクス・エンゲルス・レーニン研究所から『剰余価値学説史』が『資本論』第四巻として出版されました。ロシア訳が先に出てドイツ語原典

の方は二、三年おかれて出たのでありますが、これもまた最近、ロシア語版の『マルクス・エンゲルス全集』版で内容がすこし改訂されています。ドイツ語版の『マルクス・エンゲルス全集』にも出ておりますが、これはまだ三分冊中一冊しかでていない。ロシア語版では全部出ているのにドイツ語版ではおこなれている。原典の出版が翻訳よりおこなれるということはおかしいので、私どもは納得できない。文句をいうのでありますけれども、事実上そうです。それはとにかくとして『剰余価値学説史』が出そろったのは最近だということ、『資本論』の第一巻が出てから百年もたつてから、やっと『資本論』の第四巻、第四部である『剰余価値学説史』が出たということになります。マルクスが書いた順序からいうと『剰余価値学説史』の方が先にかかれた。『資本論』は書いた順序と逆の順序で出版されるとマルクス自身も言っております。一八六二、三年頃に『剰余価値学説史』の原稿はできています。この『剰余価値学説史』をエンゲルスは生きておるうちによう出さなかった。エンゲルスは自分で出すつもりだったのですけれども、自分では出せなかった。『資本論』第三巻を出したのが一八九四年で、その翌年の一八九五年にエンゲルスは死んでおります。エンゲルスが死んだために、エンゲルスやマルクスの弟子になるカール・カウツキーというドイツの『資本論』学者——このカウツキーは、後年には修正主義者だということになっておりますけれども、なかなか立派な仕事をしている。そのカウツキーが一九〇五年から一〇年にかけて『剰余価値学説史』を出版しました。四冊本、——巻数は全三巻ですが第二巻が二分冊になっている『剰余価値学説史』をカウツキーが出版しました。このカウツキー版は新刊の『剰余価値学説史』とひじょうに違います。どういうふうに違ふかといへば、新刊の『剰余価値学説史』の方がカウツキー版よりもマルクスの原稿に忠実なものです。カウツキーがやったのは、——長くなるから詳しいことは申しませんが、——マルクスの原稿の

ままでは本にならぬということで勝手に前後を入れかえたり、削除したり、書きたしたりしている。これはよくない。現在の版の方が正しい。だから『資本論』はですね、第一巻の初版が出てから百年近くたってやっと全部が出そろったということになります。

ところでマルクスは『資本論』を何年かかって書いたかということですが、はっきりしたことはいえませんが、だいたい『資本論』を書きはじめたのは一八五〇年以後だといえます。『共産党宣言』を書いたのが一八四八年。マルクスが三十才のときです。その前後に『哲学の貧困』だとか『賃労働と資本』だとか立派なものを書いておりますが、マルクスは革命的活動をやったためにドイツ、フランス、ベルギーとあちこち追放されました、一八四九年末にロンドンに亡命しました。それから一八八三年三月に死ぬまでロンドンでくらしただけですが、その間にもマルクスは共産主義運動の指導者として、エンゲルスといっしょに政治的活動をひじょうにたくさんやっています。また生活のための文筆的アルバイトもたくさんやっています。また政治的な論文もたくさん書いています。『資本論』だけを書いたわけではないのでありますが、だいたい一八五〇年ころからブリティッシュ・ミュージアム、すなわちロンドンにある大英博物館の図書室にいつて勉強しています。貧乏だから本が買えないし、古いろいろな文献もあるというので、毎日毎日、図書館が開く時から閉まって追い出されるまでそこにいた。そういう生活をしています。たいへんな努力をしておるわけでありす。いつも感じることでありますが、マルクスを自分なんかと比較するのは潜越なんで、頭のケタが違ふ。これは文句なしに認めるところでありますが、脳細胞の構造が違ふんですから、これは仕方がない。ところが頭がケタはずれにいよいよばかりでなくて、努力も私どもとマルクスとは違ふ。努力といえは、われわれは、麻雀しようかと思つても、イヤやめ



て本を読もうということはできないことではない。晩の十時か十一時に寝ようかと思っても、もう一時間だけ勉強しようということなら誰にでもできることです。その努力の点ですね。頭は生まれつきなんで、どうにもなりません、努力の方は、いくらか真似ができます。マルクスのようにはやれないまでも、その真似はできそうなものだと私は思うんです。そんなことを私は、『資本論』を読むときにも、その翻訳をするときにも、考えるのです。マルクスが『資本論』を書いたのは一八五〇年からだとしますと、一八八三年に死ぬまでに、三十年ばかりのあいだに、『剰余価値学説史』を含めた『資本論』を書きました。しかもマルクスが『資本論』を書いたのは、共産主義運動、革命運動の理論的武器をきたえるためであって、『資本論』を書くことそのものが目的ではなくて、革命をやるのが目的だったのです。革命の理論的武器としての『資本論』でありますから、革命運動がマルクスを要求するならば『資本論』をあとまわしにして実践運動をやるといふ、一口にいえば実践運動のあいまいに『資本論』を書いた——しかも、ひじょうに無理をしたために健康を害して、病気のために仕事を妨げられた。貧乏のためにアルバイトもしなければならぬということで、『資本論』のために本当に費やした時間はどれだけになるか、一口にいえば三十年間の半分にもたりないだろうと思います。

その『資本論』を私は三十年も四十年もかかって翻訳しているわけです。それに厭きもしないで、まだ十年くらいは仕事ができそうだから、これからも『資本論』の翻訳をつづけるつもりでおります。現在わが国でおこなわれている『資本論』には、私のもののほかに岩波文庫版があります。これは向坂逸郎訳となっておりますが、岩波文庫版の第二分冊をご覧になればわかるように、第二分冊以下を訳したのは岡崎二郎さんです。向坂さんの「後書き」によりますと、岡崎氏の訳はいいのだが、自分流に手を入れたんだというようなことであります。第

一分冊は向坂さんの訳。第二分冊以下は岡崎、向坂共訳だといえるでしょう。それからもう一つ、国民文庫版から『資本論』が出ています。これは何とか委員会訳となっておりますが、岡崎二郎そのほか何人かの名前が出ております。実際には岡崎二郎さんがやったようです。岡崎さんは私とは一面識ありませんが、この梯先生の親しい方です。向坂さんですね、私は一度も会ったことがありません。それはウソだろうという人があるかも知れませんが、事実です。『資本論』をやりながら向坂さんと会ったことはない。岡崎さんとも会ったことがありません。『資本論』には間違いがあるというようなことをさかんに書いている宇野弘藏さんは個人的に知っています。困ったことを書くなあと思うんですが。さて、『資本論』の翻訳が四種も五種もあるのは、——これは日本だけに見られることですが、ある意味では困ったことです。研究会をやるうと思ってもですね、どうかすると七人集ったら七人がみな違う本をもっているかもしれないということになります。何頁の何行目なんていつてもわからない。やっと見つかっても訳文が違う、——ひどい場合には意味が反対で逆だったりして困るんです。しかしまた、『資本論』というものはですね、原典でも、初版、第何版、カウツキー版、エンゲルス版、あるいはというふうに版が違って、それぞれ特色があって、違う版があるということはひじょうに結構だと思います。翻訳はどちらかが誤訳なんです。違うものがどちらも正しい、——二つの違うものが両方とも正しいということはありませんのであって、どちらかが間違っているのですけれども、どちらが正しいかということになりますと、私としては、たいいてい私の方が正しいだろうと思うのです。向坂さんもおれのがいちばんいいんだと思っておられるでしょう。長谷部の訳なんか奇妙な翻訳だとかいわれたことがあります。私も向坂さんの翻訳には奇妙なところがあると思います。両方で奇妙だ、奇妙だ、という。それから岡崎さん訳の国民文庫版。それから大月書店

の『マルクス・エンゲルス全集』版。これはまた岡崎二郎訳とはなっておりませんが、国民文庫版とくらべるとかなり違うようです。しかし、私の訳本とくらべると、岩波文庫版と国民文庫版と『マルクス・エンゲルス全集』版とは、かなりよく似ているだろうと思います。もちろん相違点もたくさんあるだろうと思います。違っているところは、どちらかが間違いであり、ひよつとすると、どちらも間違っているかもしれないかもしれません。結局は、研究者諸君の批判によって正しいか、正しくないかが判明するでしょう。そういう意味で、いろいろ違った翻訳があることを、私は必ずしも悪いとは思いません。ただ、正しい方に訂正すればよいと思います。

さて、『資本論』の普及についてであります。はっきりした数字はわからないけれども、第一巻は、もし第一巻第一分冊ということになれば、日本では百万部をこえているだろうと思います。ロシアで『資本論』が、今から十年ほど前に四百何十万部とか出たそうです。しかしこれは全巻の合計部数ですね。一揃いが四百何十万ではなくて、一巻も二巻も三巻もですね、全巻を合計すれば四百数十万になるといふことのようにです。しかしロシアでは、私の想像では、現在『資本論』を読んでいる人はあまりいないようです。ああいう国柄ですから、『資本論』ぐらゐ並べておかないと格好がわるい、——いわゆるつんどく、ホン読でなくつんどく、『資本論』が多いだろうと思います。日本でもつんどくが多いかもしれませんが、しかし、少なくとも読もうと思っていながら、ついで、つんどくことになるのではないかと、——いづれにしても、こういうふうに『資本論』百年にさいし、大学で記念事業がさかに行なわれるというようなことは日本だけではないか、外国では見られないのではないかと、思います。ついでに申しあげますけれども、『資本論』はおかしい、あれは百年前の本で、現代には通用しないんだというようなことが、新聞や雑誌によく出ているということ、——こうしたことについて簡単に申しあげた

い。『資本論』が百年前に書かれたときには、日本はまだ徳川時代、明治維新以前であつて、資本主義はまだ出現していない。明治三十年頃になつてやつと資本主義が確立した。そういう時代——つまり百年前には『資本論』が通用したのはイギリスくらい、マルクスが言っていることですが、資本主義的生産が世界中で例外的にしか行なわれていなかった時代、——そういう時代に『資本論』は書かれた本です。イギリスでは資本主義が一八二〇年頃に確立した。資本主義の矛盾のあらわれである恐慌がおこつたのは一八二五年が最初です。そういう時代に『資本論』が書かれた。イギリスでさえも資本主義が経済全体を完全に支配してははなくて、支配的であるけれども、資本主義のもとにまだ手工業も残っているし、封建的な残りかすもあるという百年前なのです。ところが現在では、社会主義の国をのぞけば、まだ植民地、半植民地というものもありますけれども、だいたい世界全体が資本主義の時代にはいつている。そして、たとえば日本の農業なんか資本主義ではありませんけれども、資本主義生産の枠の中にある。今日では資本主義が世界経済の支配的な体制であり、簡単に申しますと『資本論』が完全に有効な理論的な働きをしているのは今日現在においてこそなんです。百年前には資本主義は世界でチラホラ、イギリスなんかには見られなかった時代、その時代にマルクスは、ひじょうな天才だったから、イギリスをモデルにして、世界経済はこうなつていくのだという、また、資本主義というものはこれから発達していくんだけど、こういう構造をもつており、本質はこういうものであり、その矛盾はこういうものである。そうした矛盾の発展として必然的に社会主義に移つてゆくんだということを百年前に書いたのです。そして歴史はマルクスの理論を証明しました。今日ではマルクス時代の自由主義的資本主義と違い、独占資本主義、国家独占資本主義の段階にはいつているから『資本論』では間にあわない、——こういうのはありますけれども、もちろん

『資本論』に書いてあることだけで、今日の独占資本主義、国家独占資本主義の個々の具体的現象が説明できるはずがない、——マルクスの理論を發展させねばならない。自由競争に立脚する産業資本主義時代に書かれた『資本論』の個々の理論だけで、今日の国家独占資本主義のあらゆる具体的現象が説明できるはずがないのでありますけれども、『資本論』の理論を發展させて、その後の百年間の現実の歴史的発展を説明できるような理論にまで高め、具体化させることこそが、『資本論』学者の務めなのです。

さて、みなさんはこれから勉強されるんですが、ただ『資本論』に書いてあることはおかしい、現代には通用しないなどというような、消極的な書物はあまりお読みにならない方がいい。ついでですが、本物をよく知るためには、偽物はあんまり見ない方がいい。むかし、東京のある骨董屋の主人から聞いたことを申しあげますと、——私の商売でいちばん大事なことは本物と偽物を見分けることですが、小僧を雇うと三年くらい、絶対に偽物を見せません。本物だけみせる、雪舟なら雪舟の本物だけをみせる。偽物は絶対に見せない。三年間も、ゆっくりすれば四、五年も本物だけを見せておく。そうすると、偽物をもってきて見せても、あ、これはいけませんといって、本能的に偽物だとわかる。偽物をはじめから見せていると本物と偽物の区別がつきにくい、——というようなことを聞いて、感心した記憶があります。学問でもすね、よいかげんな書物を読みすぎると、無駄であるばかりでなく、本物と偽物との区別がつかなくなる。そういう心配がなくていいのであります。ただ『資本論』はおかしい、間違っているんだというようなことだけならば、誰でも一晩に三十枚も五十枚でも書ける。そういう書物を読んでもプラスにはならないばかりか、下手するとマイナスになりますから、なるべく本物を読むことをおすすめしたいのです。

さて、『資本論』の普及状況ということではありますが、さきほど申しあげたとおり日本では『資本論』がひじょうに普及している。フランスでは、一八七二年の有名なロア訳以後に、全三巻のモリトル訳が出ており、戦後にも新しい訳本が出ております。ロシア語版も、いろいろな版が発行されておる。ところが『資本論』の英語版はたいへんおくれました。一八八七年にはじめてムーアという人と、マルクスの娘婿であるアヴェリングとの共訳本が出たのでありますが、このムーアは法律家、アヴェリングは医者であって、どちらも経済学者ではありません。この第一巻の共訳本はエンゲルスが責任者になっておりますが、この翻訳の出来はよくない、名訳とはけっして言えないと思います。ところが現在、モスクワから出ている『資本論』英語版の第一巻は、このムーア、アヴェリングの訳本そのままであって、おかしいと思います。全三巻の英訳には一九〇六年から一九〇九年にかけて出たウンターマンの訳があり、これはよく出来ていると思います。戦前の高畠訳『資本論』は主としてこのウンターマンの英訳によっているようです。ウンターマンという人は『資本論』の入門書を一冊書いておりますが、あまり偉い学者ではない。えらい人は翻訳なんかやらないようです。それから第一巻だけの英訳には、イーデン、エンド、シーダー・ポール訳があります。イーデンが旦那さんでシーダーは奥さん。このポール夫妻は戦争前に日本にきたことがあるようですが、ジャーナリストだとかいうことです。これは特色のあるよい訳本です。いずれにしても『資本論』の英訳はたいへんおそい。英語版がまっさきに出てもよさそうなものだった、と思うのですが、それから、ごく最近になって聞いた話であります。北朝鮮ですね、あの三十八度線の北の北朝鮮で『剰余価値学説史』の翻訳が出たような話を聞きました。『剰余価値学説史』が出たのなら『資本論』も出ているだろうと思います。それから中国であります。中国における『資本論』の状況、これをちょっとお話し

しておきたいと思えます。ほかの国、たとえば東ヨーロッパ諸国などでも、たいてい『資本論』の翻訳が出ているらしいのですが、くわしいことは知りません。中国語版の『資本論』のことを私は河出版『資本論』第三巻の附録の『資本論年表』にくわしく書いておきました。ひょっとすると、中国語版『資本論』のことは私がいちばんよく知っているかもしれません。『資本論』全三巻の中国語版は郭大力、王亜南の共訳であります。この王亜南先生は厦門大学の校長であって私よりも五才くらい若い人です。この王亜南先生のお弟子さんに陳可焜さんという若い『資本論』学者がおりまして、この陳さんとはよく文通しておりますが、先年、この陳さんに私が、日本では一九六七年に『資本論』百年祭の催しがあるはずで、中国語版『資本論』のこと、中国訳のことを紹介したいから、できるだけ資料を送ってほしいと、できるなら訳本も送ってほしいというようなことを手紙で頼みました。その返事を中心にして、さっき申しました河出版『資本論』附録の『資本論年表』に書いたのでありますが、一九三〇年ですね、——一九三〇年といいますが、日本では一九一九年に『資本論』の翻訳が始まっていますから、日本よりも十年あまりおくれて、一九三〇年にはじめて中国で『資本論』第一巻第一分冊の翻訳が出ております。この訳本は陳さんから送ってもらいました。陳啓修という人の翻訳であります。その訳者例言をみますと、これは、河上・宮川共訳の岩波文庫版『資本論』によって翻訳したらしい。河上先生の岩波文庫版は一九二七年から二九年にかけて出ました。この岩波文庫版をもとにして一九三〇年に中国訳が出たというわけでありまして、この訳者例言は「東京にて」となっております。陳啓修という人は日本に留学していたのか、一人前の学者になってからきたのかは、わかりません。これは余談になりますが、中国に郭沫若という偉い人がいますね。日本とはなじみの深い人です。今から三、四年前のことだったでしょうか、中央線の沿線のどこかに郭

沫若記念文庫とかいうものができたようですが、その文庫の中にいま申しした陳啓修訳の資本論があるそうです。そこで、朝日新聞だったかに出た記事であります、陳啓修は郭沫若のペンネームらしく、日本で『資本論』の翻訳をしたらしいというのを見たことがあります。それで、さっき申しした王亜南先生の弟子の陳可焜さんに、郭沫若先生は陳啓修というペンネームで『資本論』を翻訳したらしいというが本当か問いあわせましたところ、それは大間違いだという返事でした。このことをある会合で話しますと、たまたま同席の伊藤武雄さん、——伊藤さんはながらく中国におられた中国研究者ですが、この伊藤さんが、——いや、陳啓修は実在の人物であって、北京大学の教授で元気にやっていたが、中国革命から二、三年後に病死した、ということでありました。この陳啓修さんが『資本論』をはじめて中国語に翻訳した人です。しかし中国には一人で『資本論』を全部翻訳した人はいりません。郭大力、王亜南共訳の『資本論』中国語版全三巻が出たのは一九三八年です。この王亜南先生に郭大力先生のことを十年ほど前に問いあわせましたところが、病気で寝ていられるということでした。もう亡くなられたかもしれません。だいたい、中国の『資本論』研究は日本よりも大分おかれており、翻訳も、日本語——河上訳、高島訳からの重訳のようなものであり、訳語も、「労賃」を「工賃」というような例外もあります。『資本論』特有の術語はたいいてい日本語と同じです。しかし、ごく最近第二巻まで出た新訳——訳者はやはり郭大力、王亜南訳となっておりますが、新訳の中国語版『資本論』は、ロシア語版の『マルクス—エンゲルス全集』を参考にして新しい注をとりいれたり、よくできているようであります。中国における『資本論』の普及状況は、ごく最近のことは知りませんが、三〇万内外らしく、人口との比率では、日本よりもはるかに少ないようです。もう一つこれも余談であります、一九三〇年代に『資本論』の一部を中国語に翻訳した人物に侯外廬と



いう人があります。ところが昨年でしたか、例の紅衛兵事件ですね。あの紅衛兵に侯外廬が三角帽子をかぶさせられたかどうか忘れましたが、とにかくつるしあげられたという新聞記事をみました。それで思うのですが、人間もですね、長生きするのもいいんですが、つるしあげられたりしないうちに有終の美をなすのもいいように思います。

『資本論』初版出版百年にちなんで、日本や諸外国のいろんな版本のことをお話すつもりでしたが、どうやら脱線ばかりしたうえ、自分のことをしゃべりすぎたように思います。お聞き苦しく、すまなかつたと思います。あまり長くなるので、このへんにいたします。粗末なお話で恐縮でしたが、ご静聴ありがとうございました。

〔本稿は昭和四二年六月二日に開催された立命館大学経済学会総会講演会で、経済学部 of 学生諸君を対象としてなされた講演の記録に長谷部教授に手を加えて頂き、本特集号に発表の運びとなったものである。——編集委員——〕